



上田ながの  
挿絵◎瀬奈茅冬\*

騎士  
の私  
と

悪魔  
の取引

百合の口付け

2DB  
二重刊シリーズ文庫

試し読み版

序章	悪魔退治	006
一章	悪魔アーニャ	018
二章	二人暮らし	040
三章	重なる夜	073
四章	女騎士の秘密と少女悪魔の過去	118
五章	さようなら	168
六章	悪魔、討ち取られる	208
七章	約束	231
終章	幸せな悪魔	252

## ◇登場人物紹介◇

### サリア=ハートネス

ローゼン王国に仕えた騎士の家系で、没落したハートネス家の娘。立派な騎士として人に認められたいと思い、悪魔退治で名を上げようとする。



### アーニャ

人の精気を吸って生きているサキュバス。悪魔らしく人間に対して結構尊大な態度で接するも、仲良くしたいとも思っている。

「……どうするつもり？」

不思議そうにアーニャがついてくる。

「どうするも何も……ローゼンパスタが食べたいんだろ？ その……店の味を再現するとはできないが、近いものは作れるからな」

答えつつ騎士服の上にエプロンを身に着けた。

「作れる？ 貴女……料理できるの？」

「当たり前だ。私が一人暮らしを始めたのは五年も前だぞ。料理くらい作れる」

「五年前？ あんた幾つよ？」

「……十八だ」

答えつつ、運よくパスタの材料は揃っていたので手早く料理を始めた。

「……なかなか手慣れてるわね。どこで習ったの？ まさか独学？」

興味深そうに料理の手際を見つめてくる。

「いや、両親が亡くなった後、私の面倒を見てくれた夫婦がいてな。教えてもらった」  
没落した後もハートネス家に仕えてくれていた召使い夫婦のことを思い出す。皆がハートネスの人間を蔑む中、唯一仕えてくれていた一族の人間だ。サリアにとってはもう一組の両親ともいえる存在である。

だが、今はその二人もいない。残っていた遺産が目減りしてしまったせいで、二人への

給金を払えなくなってしまったからだ。

それでも「給金などいりません。お嬢様を一人になんかできません。だからいつまでも一緒に」と夫婦は言ってくれた。

しかし、サリアはその申し出を断っている。

『二人の思いはありがたい。でも、それでは私の矜持が許さない。だから……私が立派な騎士になつたらその時はまた……』

そう言つて別れたのは一年前だ。

(なのに私は何をやってる?)

改めてそんなことを考えつつ、一応パスタを完成させた。

「ほら、できた。食べるぞ」

キッチンに置かれたテーブルに料理を置く。

「凄い。ホントに絵の通り……。これは意外な才能ね。女の身で騎士なんか目指してるもんだから、てつきり戦い以外はさっぱりなんだと思つてたわ」

「剣以外のことにだつて興味はある」

「へえ……ソレつてどんなことかしら？」

流し目でこちらを見つめてきた。

妙に艶やかな視線である。

その上、見せつけるようにペロッと自身の唇を舌で舐めたりもしてみせてきた。

そんな仕草のせいでキスをした時のことを再び思い出してしまう。

「ベ……別に、なんだっていいだろ。それ早く食べる！ 折角作った料理が冷めるだろ」  
誤魔化すように悪魔に告げた。

「それもそうね……それじゃあ、いただきます♪」

フオークを手に取り、アーニャは pasta を口にする。

「……………」

瞬間、悪魔の動きが止まった。

フオークを咥えた状態で硬直する。まるで凍り付いたみたいだった。

「どうした？」

流石に気になってしまう。もしかしてまずかったのだろうか？

「——す」

問いかけに対し、一言口にしてくる。

「す？」

本当にどうしたのだろうか？ なんだか心配になってしまう。

が——

「すっごく美味しいっ!!」

杞憂だった。

「これ、凄い！ 凄いわっ!! 嘘でしょ？ こんな……信じられない……」

アーニャはそのような言葉を繰り返しつつ、パスタをガツガツと食べ始める。

「普通こういう場合って凄くまずい料理が出てきて、ちよつと気ままずくなったり、私がか  
らかったりするのがセオリーじゃないの!! なのに……ホント？ これ……止まらない。  
食べるのやめられないわあっ!!」

小説とかの類いも読んでいたのか、セオリー云々とか妙なことを口走りつつ悪魔は無我  
夢中で食事を続けた。

その姿にどのような反応をすればいいのか呆然としてしまう。

「ん？ どうしたのサリア？ もしかして貴女……食べないの？ だったら私にそれ……  
ちよつだい♪」

固まっていると、アーニャはサリアの皿にまで手を出そうとしてきた。

「なっ！ ま……待てっ!! 私だつて食べるぞ！ だから待て!! ちよつ——あまり意地  
汚い真似はするなあっ!!」

キッチンに悲鳴が木霊した。

\*

（あいつ……本当に悪魔なのか？ 私の想像とはあまりに違いすぎるぞ……）

夕食を終えた後、自室に戻ったサリアはタンクトップにボクサータイプのショートパンツという寝間着姿に着替えた状態でベッドに横になり、そのようなことを考える。

サリアが想像していた悪魔——それはまさに化け物のような存在だ。人のことなど歯牙にもかけない。餌としか思っていない存在。慈悲の心など持ち合わせない。当然会話を交わすことだって不可能。互いに殺し、殺される以外に道はない。悪魔とはそのような存在のほずだった。

けれど、アーニヤはまるで違う。

(いや……油断するな。それがアイツの手なのかもしれない。人を油断させ、心の隙につける。そして相手のすべてを奪う——そんな悪魔だっているはずだ)  
決して甘く見てはならない。

「失礼するわね」

キイツと突然部屋の戸が開いたのは、そんな思考途中のことだった。

「なっ!!」

ノックもなしに突然悪魔が部屋の中に入ってくる。

「ななな……いきなりなんだっ!!」

突然の来訪に動揺してしまう。

「ちよつと話があつてね——つて、これはなかなか、意外な部屋ねえ」

室内を見回し、ニヤニヤとアーニヤは笑った。

「意外って——あっ!!」

自分の部屋がどういふ状況かということに気づく。

ピンク色のカーテンに、窓辺に飾られた花。それに可愛らしいぬいぐるみの数々というザ・少女趣味——としかいえないような室内状況を……。

「お固い男みたいなの口調で話し、騎士なんか目指してるからどんな殺伐とした生活を送っているのかと思つたら、その実は料理が得意で可愛いものが大好き——か。うふふ、なるほどなるほど」

ぬいぐるみを手に取り、人を小馬鹿にするような言葉を口にしてくる。

「違うっ！ これは違うんだ！ だからほら、早く出てけ！ 出て行けええっ！」

悪魔に対してできることは、顔を真っ赤にして声を荒らげることだけだった。

が、もちろん意味などなく、アーニヤは室内に居座り続ける。

「まあそんなに恥ずかしがる必要なんかないわよ。私だって可愛いものとか好きよ」

「う……うるさい……」

ほとんど涙目だった。

「というかお前……私の部屋になんの用事で来た？」

とはいえ落ち込んでばかりもいられない。

必死に心を立て直し、部屋に來た理由を問う。

「なにつて、もちろん寝る為よ」

「寝る為？　ここは私の部屋だぞ」

「それはそうだけど、貴女言つたわよね。好きな部屋を使つていいつてそれはその通りである。

しかし、部屋は他にも沢山空いているのだ。わざわざこの部屋を選ばなくても……。

「私が回復する為には精気が必要。で、私に精気をくれるのは貴女よね？」

「それは……確かにそうだが……」

「だったら同じ部屋にいた方が何かと好都合だとアーニャは語つてきた。

「好都合？　どういう意味だ？」

「どういう意味も何も……一緒にいればこういうことだつて簡単にできるでしょ」

「そう言うたアーニャはベッドに乗り、サリアの身体を押し倒してきた。

「な……なななっ！　何をっ!!」

突然すぎる出来事に動揺してしまう。

「何を——を何もないでしょ。今日は沢山食事をする事ができたけど、肝心な精気を吸えてない。この意味……分かるわよね？」

「そ、それは……」

もちろん理解している。というか、分からないはずがない。

またしても洞窟でのキスが脳裏に蘇ってきた。

「だから……いいでしょ？」

「し、しかし……それは……私が興奮していないと駄目なんだろう？ 私は別に興奮なんてしていないぞ」

そう口にしつつ、自分にのし掛かる銀髪少女の唇へと視線を向ける。

艶々とした綺麗な口唇だ。皮が捲れているなどということもなく、とても瑞々しい。

（私……この唇とキスを……）

考えると喉が渴いた。思わずゴクツと唾を吞んでしまう。

（つて、何を考えている！ 変なことを考えるなっ!!）

必死に自分自身に言い聞かせる。

だが、意識すればするほど何故か胸の鼓動が激しさを増していった。

「本当に興奮していない？」

小悪魔みたいな表情で尋ねてくる。

「あ……当たり前だ」

頷く以外に選択肢はなかった。

「それじゃあ……試させてもらおうわよ」

一言口にしてくる。

それと共にゆっくりとサリアの唇に自身の唇を寄せてきた。

「あ……だ、駄目……」

制止の言葉を口にする。

しかし、悪魔は止まってなどくれず――

「んっ……んんんっ……」

再び唇に唇が重ねられた。

またしてもあの柔らかさと温かさが伝わってくる。

「んふふっ」

前よりも強く押しつけられた。

いや、今回はただ唇を重ねてくるだけでは終わらない。

(なっ……舌……舌がっ!!)

サリアの口内にアーニャは舌を挿し込んだ。

「んっふ……むふううっ!!」

まさかの事態に慌てて顔を背けようとする。侵入を防ごうと口唇を閉じようとする。

が、どんな抵抗も意味などないともいうように、悪魔は舌をより中へと進めてきた。



ギシツとベッドが軋む。

「んはあああ……はあつはあつ……キス……気持ちよかったみたいね」

一旦唇を離して問うてくる。

瞳を潤ませ、口唇と口唇の間に唾液の糸を伸ばしながら……。

「そ、そんなこと……」

確かに彼女が言う通りだった。

が、簡単に認めることはできない。

「本当に素直じゃないわね。でも……えつと……その……そう、こんなのはどうかしら？」  
 アーニャはちよつと困ったような表情を浮かべた上で、今度はサリアの乳房に手を伸ばしてきた。

「あっ！」

黒いタンクトップ越しに乳房を揉んでくる。細指が柔肉に食い込んできた。

サリアの胸は自分で言うのもなんだがあまり大きくはない。とはいえ完全に平坦というわけではない。愛撫によって形が変えられた。

「大きくはないけど、ちようどいいサイズって感じね」

「そ、そういうことは言うな」

「でも本当のことよ。それに……大ききなんて関係ないでしょ？ ほら……どう？ 小さ

くても十分気持ちいいんじゃない？」

楽しげに微笑みつつ、さらに乳房への愛撫を続けてくる。何度も何度も捏ねくり回すように胸を揉んできた。

「べ、別に気持ちよくなんか……」

否定の言葉を口にする。

実際、そこまで気持ちいいというわけでもなかった。なんというかこそばゆさを感じる。くすぐったさにも似た感覚に、幾度も身を振った。

ただ、しばらく愛撫を受け続けていると、そんなこそばゆさが変化を始める。

（な、なんだこれ？　こんなの知らないぞ？）

グニグニという指の動きに合わせて、キュンツと胸が締めつけられるような切なさを肉体は感じ始めた。

「んっふ……くふうっ……んっんっんっ……」

自然と吐息も漏れ出そうになってしまふ。油断すれば変な声——イヤらしい嬌声を漏らしてしまいそうだった。

口唇を引き締め、吐息を抑え込もうとする。

「……なかなか敏感な身体みたいね。ほら、我慢する必要なんかないわよ。啼きたいなら啼きなさい」

サリアが見せる反応に嬉しそうな表情を浮かべつつ、さらに愛撫を濃厚なものに変えてくる。より強く胸を指で圧迫してきた。

刻まれる刺激——ビクッビクッと肉体が震えてしまう。その動きによつてベッドがギシツと軋んだ。なんだか生々しい音色である。

「はっふ……くふんんっ」

ベッドの軋みにユニゾンさせるように、熱感こもった吐息を漏らしてしまった。

「ほら、感じてる」

ニヤニヤと笑いかけてくる。

「そんなこと……んくんっ！ はっふ……んんんっ」

当然否定はした。

が、指の動きに合わせて震えてしまう身体を止められない。甘い響きを含んだ声を響かせてしまう。これではなにを言ったところで説得力などなかった。

肉体はどこまでも敏感だった。最初こそそばゆさのみだったのに、ほんの少し愛撫されたただけだというのに、明らかに快楽としか言えない感覚を覚えてしまっている。胸を揉まれるたびに身体中から力が抜けていった。

手の動きが激しさを増していくのに比例して、漏らす吐息も「はあはあ」という荒いものに変わってしまう。

「勃起してきたわね」

悪魔の言葉通り、乳頭も屹立を始めた。

「ち……ちがつ！」

「何が違うの？ ほらっ」

否定を否定するように、乳首に指を添えてくる。

「あっ」

下着越しにポツツと勃った乳頭に触れられた途端、電流のような刺激が走る。一瞬視界が白く染まるほど強い感覚だった。身体がはねる。眉間に皺が寄り、瞳が切なげに潤んだ。「ほら、感じてる。違うなんていつても説得力がないわよ。いいんでしょ？ こうされるのが気持ちいいでしょ？」

サリアが見せる反応にアーニャは嬉しそうな表情を浮かべると、より乳首に対する愛撫を激しいものに変えてくる。

ただ指で摘まんでくるだけでは終わらない。クリクリと転がすように刺激してきたり、時には指で乳頭を押し込むように突いてきたりもした。

「ああ……こんな……嘘……んっく……あっあっあっ」

知識はあったし、ムラムラとして身体を持って余すような夜を過ごしたことだってある。サリアだって年頃の女なのだ。

けれども実際に自分を慰めるような行為をしたことはこれまでなかった。

自分は騎士になる。誰にでも認められる存在になり、ハートネス家を再興する。それまでは決して欲望に流されてはならない——そんな強い意志で耐えてきたから。

だからこそ、刻まれる性感はすべて生まれて初めてのものだった。

これまで感じたこともない甘い肉悦。アーニヤの指が蠢き、乳房を刺激されるたび、全身が燃え上がりそうなほどに熱くなっていく。乳頭が、下腹部が、ジンジンと疼いていった。

「かなり感じてるみたいね……。本当に敏感……。えっと、それじゃあ次は……」

悶えるサリアの姿にアーニヤは次の行動に移ろうとしてくる。ただ、その手際はあまりいいものではなかった。

次は何をすべきか？ 迷っているようにも見える。

「あ……アーニヤ？」

一体どうしたのだろうかと首を傾げる。

「べ、別になんでもないわよ！ そう……。えっと……。そうだ！ 次は直接してあげる」  
少し焦るような素振りを見せつつ、今度はサリアのタンクトップを捲り上げてきた。

「やだっ!!」

プルンツと乳房が弾けるように剥き出しとなる。悪魔の前に自分の胸を晒す形となって

しまった。

乳首が勃起した胸。それを他者に見せる——耐え難いほどの羞恥を感じ、サリアは両手でこれを隠そうとする。

「駄目よ。しっかり私に見せなさい」

が、アーニャはそれを許してはくれなかった。

ジツと真つ直ぐサリアを見つめて命令してくる。

「ううう……恥ずかしすぎる……」

できればこの場から逃げ出したいほどの羞恥を覚えつつも、一度抱かれると決めた以上逆らうことなどできず、両手の動きを止めた。

「いい子ね……それじゃあ……いくわよ」

こちらの反応に嬉しそうな表情を浮かべながら、アーニャは剥き出しの乳房に唇を寄せてくると、チュツと乳頭にキスをしてきた。

「くひんっ！」

口唇が乳首に触れた途端、先程指で弄られていた時以上の性感が走る。声を抑えることなどできず、女騎士は甘く喘いだ。

「んふふ」

そんな反応を上目遣いで見つめつつ、アーニャはさらに乳首へのキスを繰り返してくる。

チュツチュツチュツと何度も口唇を押しつけてきた。その上で舌を伸ばし、乳首を舐めてくる。舌先で乳輪をなぞり、転がすように乳首をチロチロと刺激してきた。

「あつは……はふつ……んはあああつ……」

舌の動きに合わせて火照りがより大きくなっていく。乳頭を転がされると、それだけで身体がドロドロに蕩けてしまいそうなほどの心地よさを覚えてしまう自分がいた。

我慢できずに熱い吐息を漏らす。愛撫に合わせて「あつあつあつ」と啼いてしまった。

（なにこれ？ 知らない。こんな感覚初めて……。恥ずかしい。恥ずかしいのに……。駄目。なんか……。身体がジンジンする……）

疼きのような感覚が大きくなっていく。特にそれを感じるのは下半身だった。

ほとんど無意識のうちに太股同士を擦り合わせ、モジモジと腰を左右に振ってしまう。まるでこつちも弄って欲しいと無意識のうちに訴えてしまっているような動きだった。

「えっと……これ……あそこも弄って欲しいってことかしら？」

当然アーニャはサリアの欲求に気がつく。

「そ、そんなことは……」

もちろん認めることなどできなかった。

自分から秘部を弄って欲しいなどとはしたくない真似はできない。

「本当に？ えっと……これでも？」

ちよつと考えるような素振りを見せた後、アーニヤはサリアの下半身へと手を伸ばそうとしてきた。

「あ……そ、そこは……」

流石にちよつと怖さも感じてしまう。

「怖がる必要なんかないわよ」

そんなサリアに対し、アーニヤは笑いかけてきた。

「大丈夫。初めてを奪うつもりはないから。処女は……そうね、貴女が将来会う大事な人の為に取っておいてあげる。好きでもない相手に純潔を捧げたくなんかないでしょ。その気持ち……私も分かるわ」

そこまで語った上で、

「私だって初めてを捧げるなら好きな人がいいしね」

ボソツとアーニヤは呟いた。

「え……そ、それって？」

その言葉の意味を考える。

「へ？ あ……な、なんでもない！ なんでもないわよっ!!」

どうやら先程の言葉はほとんど無意識のうちに口にしたものらしい。アーニヤはボツという音が聞こえそうなほどの勢いで顔を真っ赤に染めてみせてきた。

「もしかして……アーニヤも……」

悪魔の言葉の意味に気づく。

「う、うるさい！ そんなことはどうでもいいでしょ！ それよりほら!! どう！ これ  
でどうかしらっ！」

これに対し、アーニヤは誤魔化すようにサリアの秘部に直接指を添えてきた。  
「ああっ！」

乳房に対する愛撫によって濡れ始め、開き始めていた肉花弁に指が押しつけられる。途  
端に乳房を弄られていた時以上の刺激が走った。バチッと視界に火花が飛ぶ。ビクンッと  
腰がはねた。

「んふふ……凄い。貴女のここ……もう濡れてるわよ」

「あ……い、いくなっ！」

濡れ始めているだろうことは自分でもある程度分かつてはいた。しかし、改めて他者に  
その事実を突きつけられると恥ずかしさを覚えずにはいられない。

「そ、そんなことない！ 私は濡れてなんか……」

濡れているという事実だつて認めるわけにはいかず、違うと口にした。

けれども否定などなんの意味もない。

「そういう無意味な言葉は口にしない方がいいわよ。ほら、これでも？ これでもまだ濡

れてないなんて言えるかしら？」

挑発的な言葉と共に、悪魔は指を蠢かしてくる。愛液でしつとりと潤み始めている秘裂を上下に擦り上げてきた。

ぐちゅっぐちゅっぐちゅっ——動きに合わせて淫猥な音色が響き渡る。明らかに水気を含んだ音色だった。

「ほら、こんな音が聞こえる。本当にイヤらしい音……。ねえ、これでもまだ濡れてないなんて貴女は言うのかしら？」

「や……。そんなこと……。口にするなあっ！」  
首を左右に振る。

「でも、事実よ。気持ちいいんでしょ？　こんなにあそこを濡らしちゃうくらいに」  
じゅっく……。ぬちゆるっ……。くっちゅくっちゅくっちゅ……。

それほど激しい動きではない。寧ろ指の動きは緩慢と言ってもいいくらいだった。

それでも鬩の一枚一枚を的確に擦ってくる。膣口を刺激され、陰核を擦り上げられるたび、甘い刺激が走る。

「あっあっあっあっあっ」

動きに合わせて甘い声で啼きながら、肢体を幾度となく震わせた。

「ああ……。これ……。何か来る。こんな感覚知らない。ああ……。なんだ？　これ……。あっあ

っ……私……どうなって……」

やがて、これまで感じたこともないような熱い何か、下腹部から膨れ上がってくる。身体だけじゃない。脳髓までも蕩けてしまいそうになる感覚だ。

「駄目だ。これ……変になる。知らない……。こんなの初めてで……怖い！　アーニャ……ちよつと待って！　止まって！　頼むっ!!」

生まれて初めての感覚に恐ろしささえ感じる。だから必死にやめてくれと訴えた。

「大丈夫よ……その感覚、きつと心配するようなものじゃないわ。だから身を任せなさい。ほら、抵抗なんかしないで」

だがアーニャは聞き入れてなどくれない。

それどころかさらに指を激しくくねらせてくる。

「無理……抑えられない……」

「いいわよ。ほら……サリア……んっふ……んちゅうっ」

指で愛撫してくるだけでは終わらない。ニッコリと笑うと共に、アーニャは口付けまでしてきた。

「むっふ……んっちゅ……ちゅっる……んちゅううっ」

舌を挿し込み、激しく啜ってくる。

（駄目……き……気持ちいい……私……もうっ……）



「もう何度もしてるのに……いつまで経っても緊張するのね」

身体がガチガチになっただけに気づいたアーニヤが笑った。

「……仕方ないだろ。こんなことに慣れることなんかできるか」

「生真面目ね。でも……そういうところ、結構好きよ」

好き——その言葉に、何故かドキドキとさらに胸が高鳴っていく。

そのようなこちらの変化に気づいているのかいないのか、アーニヤはそつとサリアにキスをしてきた。

「んっふ……んんんっ」

いつも通り最初は触れ合うだけのキス。

けれど、すぐに舌を挿し込んでくる。

「あっふ……んふうっ……むっむっむっ……」

口内がかき混ぜられる。

（何故だろう？ どうしてこんなに気持ちがいい？）

舌を動かされるだけで、口腔を吸われるだけで、身体中から力が抜けていく。全身が、特に下半身が熱く疼き始めた。

モジモジと太股同士を擦り合わせる。

するとアーニヤがサリアの身体をベッドに押し倒してきた。

「キスだけで我慢できなくなっちゃったのかしら？」

「こちらにのし掛かった状態で一旦唇を離し、問いかけてくる。

「な……そ、そんなこと……」

頷けるはずなどなかった。

「否定なんかしても無駄よ。ほら……これでもまだそんなこと——なんて言えるかしら？」  
首を横に振っても意味などない。アーニヤは器用に騎士服のロングパンツの中に手を入  
れ、ショーツ内へと指を挿し込んだ。

「あっ」

秘部に触れられる。

途端にグチュツという音色が聞こえた。

同時に甘く痺れるような性感が走り、思わず声を漏らしてしまう。

「ほら、濡れてる」

ニヤニヤとアーニヤは嬉しそうに笑った。

「い、言うなあ」

堪え難いほどの羞恥を覚えてしまう。

「だけど本当のことよ。ほら……こうされたいんでしょ？　こういうのが気持ちいいんで  
しょ？　んふふ♥」

けれどアーニヤは止まらない。それどころかサリアが恥ずかしがれば恥ずかしがるほど、さらに指を淫靡にくねらせ、秘部に対する愛撫を激しいものに変えてきた。

秘裂をなぞり、陰核を押し込んでくる。襲の一枚一枚をグチュグチュと擦り上げてきた。「あつあつあつ……」

嬌声を抑えることができない。指の動きに合わせて啼き声を響かせつつ、ベッドシートを掴み、身悶えた。

「気持ちよさそうね。でも……もつとよ。もつと感じさせてあげる」

「もつと？ これ以上何を？」

「もちろんこうするのよ」

そう言うとアーニヤはサリアのロングパンツと下着を脱がせてきた。散々愛撫され、愛液に塗れた肉花弁が剥き出しにされてしまう。

しかも、ただ服を脱がせてくるだけでは終わらない。両足を掴み、大きく股を左右に開いてきたかと思うと、クパッと開いてしまった肉穴に顔を寄せてきた。

サリアの女性自身をアーニヤの息が届くほどの至近でマジマジと見つめてくる。

「や……駄目……。恥ずかしい。見ないで」

女として最も恥ずかしい部分を間近で見られる——頭がクラクラしてしまうような状況だった。

「別に恥ずかしがる必要なんかないわ。ヒクヒク褻が動いてる有様……すつごく綺麗よ。それにこの匂い。女って感じがする。なんだか私まで興奮してくる匂いだわ」

一々具体的に感想を述べられるのが辛い。

「だ、だからそういうことは……」

「とか言うけど、本当は期待してるんでしょ？ その証拠に……どどんエッチな汁が溢れ出してくる……」

そう口にすると共にアーニャは秘部に口付けをしてきた。

「んっちゅ」

口唇が敏感部に押しつけられる。

「あひあっ！」

媚肉が唇で圧迫された。

途端に指で弄られていた時以上の刺激が走る。思わず顔をのけぞらせ、部屋中に響くほどの喘ぎ声を漏らした。

「んふふ……ほら、気持ちいい。んっちゅ……ちゅっちゅっちゅっ……はちゅうっ……んっちゅ……れるっちゅ……ちゅっちゅっ……ちゅれろお」

サリアが見せる反応を上目遣いで見つめつつ、キスを繰り返してくる。いや、キスだけじゃない。舌を伸ばし、敏感部を舐め回すなどという行為までしてきた。

溢れ出す愛液を唾液で上書きしようとするかのように、髀全体を舐め上げてくる。その上で、唇を強く押しつけてきたかと思うと、じゅるじゅるという下品な音色が響いてしまうことも厭わず、肉花弁を吸引するという行為までしてきた。

「あつあつあつ！ それ……駄目っ!! んんん……感じすぎる……」

愛撫の激しさに比例して愉悅が増幅していく。自然と腰が浮いてしまった。思わず手を伸ばし、股の間のアーニャの頭を掴んでしまう。

「もう少しの我慢よ。この程度で満足しちゃ駄目。ほら……ちゅっろ……れっちゅる……ちゅずるるる……もつと感じさせてあげるから」

何をしたところでアーニャは止まってはくれなかった。

それどころかより強い快感を刻もうとするかのように、膣口や髀だけではなく、クリトリスにまで舌を這わせてくる。与えられた性感によって勃起し始めていた陰核を、舌先で転がし、幾度も舐め上げてきた。

「んひんっ！ それ……ああ……無理……。イクッ！ 私……イッちやう……」

当然のように絶頂感が膨れ上がってくる。

「いいわよ。ほら、イッて。イキなさい」

後押しをするように、舌の動きを激しいものに変えてきた。

「駄目……。駄目よ……駄目えええっ！」

けれど、抑え込む。必死に全身を包み込もうとする性感に耐え続けた。

「どうしたの？ 何故我慢するの？ 遠慮する必要なんてないわよ」

不思議そうに尋ねてくる。

「なんでって……だって……それじゃあ私だけが気持ちよくなってしまおう。なんか……それは……い……いやだ……」

どうしてこんな感情がわき上がってくるのか理由は分からないけれど、アーニヤにも一緒に気持ちよくなつて欲しいと思っている自分がいた。

悶えつつ、それを伝える。

「……ふ、ふん」

この答えに一瞬アーニヤは頬を赤く染めた。動揺したように少し言葉に詰まったような素振りも見せる。

ただ、それはほんの僅かな時間でしかなかった。

すぐに少女悪魔は嬉しそうな笑みを浮かべると「それじゃあ私も感じさせてちょうだい」と口にし、体勢を入れ替えてきた。

股間への愛撫を続けつつ、サリアの顔を跨ぐ——いわゆるシックスナインである。女騎士の眼前に、アーニヤのスカートの中身が突きつけられた。

ショーツが見える。レースの下着だ。色は子供っぽい外見とは裏腹に、大人っぽさを感じ

じさせる黒。そんな下着が濡れていた。内側から溢れ出す愛液によって……。

「濡れてる」

「当たり前よ。ほら……結構もどかしいから早くして」

フリフリと腰を左右に振ってみせてきた。

「……ああ……」

ゴクツと唾を呑みつつ頷くと、サリアはアーニヤの腰に手を回すと共に、秘部へと顔を近づけていった。

ちゅっろ……れろおおっ……。

ショーツのクロッチ部分を横にずらし、剥き出しになったピンク色の肉花卉に本能のまま舌を這わせる。

「あふっ！ んんんっ……いいっ」

少し舐めただけでしかない。が、すぐにアーニヤは快楽の悲鳴を漏らしてくれた。

いい——その言葉を証明するみたいに、さらに愛液を分泌させたりもしてくれる。ムワッとした発情臭も広げ、鼻腔をくすぐってきた。

「あ……アーニヤっ！ アーニヤっ！ ふっちゅ……れろっ……ちゅれろおっ」

我慢できないほどに興奮が膨れ上がる。

わき上がる本能に後押しされるように、サリアは少女悪魔の秘部を舐め回した。

技巧もなにもない。滅茶苦茶な愛撫だった。

ただ、それでもアーニヤは感じてくれる。

「んんんっ……そう、あっあっあっ……そんな感じよ。いいわ……んふうっ……感じる……あっあっあっ」

舌の動きに合わせて可愛らしい啼き声を聞かせてくれた。

自分の舌でアーニヤが感じている——そう考えるとなんだか嬉しい。もつと気持ちよくしてやりたくなるし、もつと啼き声を聞きたくもなってくる。

欲望に抗うことなどできない。

サリアは舌の動きを激しいものに変え、肉襞を愛撫する。ヒクヒク蠢く肉穴を舌先で刺激し、勃起したクリトリスを啜った。

そうして愛撫を激しくすればするほど、アーニヤは敏感に反応してくれる。艶やかな嬌声を漏らしながら、小刻みに肢体を痙攣させてくれた。

「あああ……イク……これ、凄いわ。凄くよくて……んんんっ……我慢できそうにない」  
ついには限界を訴えてくる。

「いいぞ……。んんっ……。イキたいなら我慢するな……。んっちゅ……。れろっれろっれろっ」  
絶頂感の後押しをするように愛撫をより激しいものに変えていく。

「くひんんっ！ それ……感じすぎる……。ああ……。でも……。一緒……。イクなら……。貴女も





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

魔界転生  
リアルノベルズ

戦うヒロインを屈辱させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?  
ジャンルはわからない  
ドキドキクラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説シリーズ!

女刑事美優  
美優は自らの身体から

リアルドリーム文庫



# あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫

あの人気作品の  
外伝作品もあっ!!  
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト  
から書籍化!  
アクターズノベルズ

異世界で  
手に入る  
珠玉の  
ライトノベル?

ドキドキクラブな  
ハイレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫